

プロローグ

運命というものが存在するか、と尋ねられたら、葛 和真は迷いなく否定するだろう。不可思議な力が働いて人のなりゆきが変わるなど、論理的だとは思えない。人生は、環境や意思や、その他諸々の現実的要因で決まる。和真が勉学に励み医者を目指していることも、そのような運命だからではなく、父と自分の意思による。先日の期末考査も全て満点だった。内申点も5以外はない。教師には決して逆らわない。そして今日も言いつけ通り、最も安全性が高く効率のよい家路につく。

そういうものだ、思っていた。

前編

小室 憂は両親の怒声に嫌気がさして家を出た。

狭い3LDKぽっちのアパートで、父と母は気が狂ったようにいつも言い争いをしている。お前が悪いんだ、あんたのせいで、一体何度耳にした言葉だろうか。そして大抵、食器か何かが叩きつけられる音に変わる。

小室は、うるさいと叫ぶことさえできず、小さな玄関を飛び出した。

とはいえ、行くところなんてない。

学校にも、もう何ヶ月も行っていない。本当なら、中学3年生に上がる前の春休みだ。どこへ行っても浮かれたやつらばかりで嫌気がさす。何がサクラサクだ、ああ鬱陶しい。

そんなときは大抵、家からも学校からも少し離れた裏路地で、何もせずに時間が過ぎるのを待つ。夜になれば父も母も、しょうもない稼ぎのために家を出るから、そのときを待つ。

散らかったアルコール缶の群れ、シャッターの閉じたクリーニング店、落書きされて何が書いてあるかよく分からないポスター。それらの意味のなさ、ほんの少しだけ小室を安らがせてくれる。

細い道を通り抜けた高架橋の下に、階段で降りて行くことのできる小さなスペースがある。そこが主な小室のたむろ場所だ。何もない、何も聞こえないのがいい。

しかしその日は、いかにもガラの悪い男が2人と、高校生くらいだろうか、制服姿の女がいた。男たちが女をコンクリートの壁に追い詰めて、女は明らかに嫌がっている

る。ここは小室のたむろ場所だ。こんなところで事に及ばれたら嫌だな、そんな思いだけだった。

「あんたら何してんの」